



これからの学校体育の役割と授業づくりの工夫

国士館大学文学部教育学科 教授 細越 淳二 氏



体育授業は、種々の運動をもとに展開されますが、そもそも体育で扱う運動には、どのような“よさ”があるのでしょうか？ どのような“よさ”を大切に、私たちは体育授業を構想し、実践しているのでしょうか？

この点について筆者は、次の4つの点から答えることにしています。

- ① からだづくり…体力のある体、健康な体、動ける体
- ② あたまづくり…イメージしたり、見通しを持ったりする力
- ③ こころづくり…運動を通して生まれる気持ちを受け止める力、他者と気持ちをすり合わせる力、やり抜く心等
- ④ なかまづくり…仲間とともに課題達成し、その凝集性を高める経験

これらは言葉や枠組みは異なりますが、現在の学習指導要領に示される「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」にも符合するものだと考えますし、激変するこれからの社会を生き抜く子供たちが生き生きと過ごしていくための基盤になる力だと考えています。

ではこの実現のためには、どのような授業づくりの工夫が求められるでしょうか。筆者は令和5・6年度にわたり、本市の「教員の指導力向上に係る大学と連携した授業研究（体育・保健体育）」に参画し、各校の先生方と指導案検討・授業観察・研究協議をさせていただいている。そこでは専門職として各運動領域の内容理解に努めるのは当然しながらも、それを目の前の子供たちに適した形にどう教材化すればよいのか、その教材に適した教師の働きかけには、どのようなものが考えられるか等、先生方と協議しています。そして各教材を適用する際には、「運動が苦手な子も達成できるようなやさしい課題から始めて、「活動は同じだけれども、場や条件を少しだけ変えた次の課題を考えましょう」と言っています。筆者はこれを「小さじ1杯の工夫」と呼んでいます。毎回、先生方と授業の動画を見返しながら、より良質で子供にとって意味ある授業にするためには何が必要かを議論しますが、これに参加する先生方は、まさに「学び続ける教師」「教師のアクション・リサーチ」を実践しているといえます。

体育は楽しくてよいのだと筆者は考えます。しかし「楽しさ」には“質”があります。「やってみて楽しい」の世界から、仲間と一緒に関わり合いながら次の課題にチャレンジすることを通して「できて・わかって、もっと楽しい！」世界へと、先生方の手で子供たちを導いてほしいと願うと同時に、子供たちが「あと少し、もう少し」自分を変えたいと思える「小さじ1杯の工夫」を、引き続き、先生方と見付けていきたいと思います。



算数・数学の授業の不易と流行

埼玉大学教育学部 教授 二宮 裕之 氏

かつて、算数・数学という教科の目標が「問題を解けるようになること」と捉えられていた時代があったように思います。そのような捉え方は未だ根強く世の中に存在しているようで、特に「試験」「入試」などの現実に直面すると、「できなくてもきちんと理解できていればよい」という見識は、単なる言い訳・負け惜しみのようにしか響かないこともあります。しかし近い将来、「入試」や「教育評価」などの『現実』がより望ましい形に変容することで、算数・数学の教科観も「できる・できない」という表面的なものから、より本質的なものに変わっていくに違いありません。

数年前より戸田市教育委員会の「大学と連携した授業研修（算数・数学）」に関わらせていただいている。またそれ以前より「戸田市算数数学教育研究部 授業研究会」にも頻繁にお声がけいただいていることから、特にここ数年は戸田市内の小・中学校での算数・数学の授業を数多く参観してきました。平成29年告示の現行学習指導要領以降、算数・数学の授業も大きく様変わりしていますが、特に戸田市ではICTを積極的に活用する方向で様々な「新しい」試みが推進されています。その中には、従来からの『常識』を根底から覆すようなものも含まれています。しかしここで改めてきちんと考へるべきは、その『常識』が算数・数学教育の「不易」として私たちが過去から未来に渡り堅持すべきものなのか、それとも時代とともに変容する「流行」に過ぎないものなのかということだと思います。

ここ数年、戸田市内小・中学校の先生方にとっての「新しい」常識の一つは、極度のICT化でしょう。特に、黒板を全面廃止して、デジタル教材や授業支援システムを最大限利活用するといった方針に、戸惑われた（戸惑われている）先生方も多いと思います。AIをはじめとするコンピュータテクノロジーが生活の一部になると相まって、学校教育にICTが深く根付くこと自体は時代の必然です。しかし、他市町村に先立つて「なぜうちの学校で」と思っている先生方も少なくおられるかもしれません。現時点では数少ない市町村で試験的にこのような先進的な実践に取り組んでおり、その一つが戸田市です。その試みは、それがそのままの形で未来永劫続くわけでは無いという点では「流行」の一つかもしれません。しかしそれは必ず、些か形を変えたとしても近未来の教育の姿であることは間違いない、そのような意味では「不易」と考へることができます。

ここ数年私が戸田市内の小・中学校で算数・数学の授業を参観して、必ずコメントすることは「その授業が何を目的としているのか」ということです。言い換えるなら、授業者が子どもたちの数学的活動においてどのような活動を期待するのか、そしてそれは子どもたちにとってどのような意味や価値を持つのか、ということです。文部科学省は「資質・能力の育成」を前面に掲げています。現行の学習指導要領で述べられていること自体は、今の時代の「流行」を如実に反映するものかもしれません。しかし、それぞれの時代に求められる「流行」を具現化させ、近い将来における教育の「あるべき姿」を見据えながら教育を進めていくこと自体は、いつの時代においても教育の「不易」に相当するのではないかと思っています。

